

二〇六〇年、父になる。

函館市立本通中学校 秋田麗王 2年

二〇六〇年、今から三十六年後。僕は父と同じ五十歳になる。僕もその頃は、中学生の父親になっているだろうか。

父は、僕が生まれてすぐの頃から、道外で単身赴任をしているので、長期の休暇でしか会うことができない。そのため、父の帰省は僕の一番の楽しみであり、我が家の一大イベントでもある。

空港に迎えに行くと、僕は大勢の人混みをかき分けて、到着出口の前の最前列を陣取って父を待ち構える。出口の扉から出てきた父の元へ、ダッシュで駆け寄って抱きつく。これが『帰省の定番』だった。その感動的な再会シーンが、よっぽど目立っていたのか、新聞記者から取材を受け、大きく掲載されたこともあった。

あれから…五年。中学生になった今も、母と一緒に空港に父を迎えに行く。しかし、到着出口の最前列で待ち構えることも、抱きつくことも、さすがに無い。今は、人集りの後ろの方に立ち、照れ臭さを誤魔化すために、スマホを弄りながら出迎えるスタイルが、すっかり『定番化』している。

「学校は楽しいか?」「今は何が流行っている?」「何か欲しいものはあるか?」…。僕の身長も声もこんなに変わったのに、父は以前と変わらず、会いたかった気持ちを爆発させるかのように、質問が止まらなくなる。数年前までは、僕も父と同じ熱量で質問に答えていたが、最近では「いや…べつに…」と素っ気ない返事をするが増えた。もちろん、父の帰省は今も変わらず嬉しいが、感情を表に出すのが照れ臭いのだ。

僕の成長を誰よりも喜んでくれて、いつも全力で応援してくれる父。熱量の高さで愛情を表現してくる不器用な父。実は、僕が想像するより何倍も、さみしい思いや辛いこともあると思うが、一切弱音を吐かずに、僕のためや家族のために頑張っている父を、尊敬しているし、感謝している。

僕は今のところ、まだ将来の夢は決まっていない。ただ一つだけ決めていることは、父のような家族想いの愛情深い人間になろうと思っている。

二〇六〇年、五十歳。
僕も父のような父親になっているだろう。

拝啓、私へ

釧路市立美原中学校 佐々木碧 3年

拝啓、たくさんの私へ。未来という言葉が嫌いだった私へ。私からすれば、貴方達こそが「未来」で、何より嫌いな存在なのだけれど、貴方達は未来を好きになったのだろうなと思ったりもして。だって貴方達は「今」が大好きなのだから。私と同じで。

二〇二九年、ハタチになった私へ。「お酒なんか嫌い」と思っている私のことなど忘れて、大学の友人達と飲みに行ってしまうんでしょう。そんな貴方が嫌い。

二〇三二年、二十三歳、社会人一年目の私へ。「音楽関係の仕事に就くんだ」と思っている私の夢を諦めて、一般企業に就職するんでしょう。そんな貴方が嫌い。

二〇五四年、四十五歳の私へ。ずっと「人の上に立つのは無理だ」と言っている私を置いて、上司として責任をもって仕事をしているんでしょう。そんな貴方が嫌い。

今が一番楽しいのに、幸せなのに、どうして未来は訪れるのだろうか。私も、私をとりまく環境も変わってしまう。それが何より悲しい。寂しいと思ってしまう。あと何日、今隣にいる人と笑いながら話せるのだろうか。あと何日、私は私でいられるのだろうか。私の人生はいつ終わってしまうのだろうか。それが怖い。

でも、それでも、私の「過去」はすばらしかったと胸を張って言える。昔の私は今の私を否定するかもしれない。「未来なんか訪れなくていい」と突き離されるかもしれない。けれど今の私は、昔の私のおかげで存在しているのだからそこにはまぎれもない感謝と愛がある。これからのことなんて誰にも分からない。けれど全ては変わってゆく。私の嫌いな未来は必ず訪れる。そのときに、過去を愛することができるように、私は生きてゆきたいのだ。いつか来る終わりのときに、「幸せだった。」と思えるように。だから、どうか貴方も、「今」を大切にしてほしい。貴方がどのような生き方を選んでいるのか、私には分からないけれど、さらにその先の「私」が、貴方を愛してくれるように。

ああそれと、最後にもう一つ。私は貴方が嫌いだけれど、貴方という可能性を信じている。私は貴方を信じて、貴方に私の全てをたくすから。だからどうか、幸せになれ、私。

二〇三四年の私 ―故郷を守るために―

旭川市立緑が丘中学校 佐々木香杜 2年

私は自然が好きだ。生まれ育った家の近くには森林公園や北星山があった。散歩をしたり虫捕りをしたり、庭にくる野鳥にえさをあげたりして過ごしてきた。

今年の四月、中富良野町から旭川市の中学校に転校してきた。初めての転校で緊張したが、みんな優しく話しかけてくれ、すぐに友達ができた。前の学校には無かった部活動にも入ることができた。旭川市は、大型のショッピングセンターや病院、飲食店などがたくさんある。そのため、便利で楽しい毎日を過ごしている。しかし、どこか寂しく感じる自分がいた。休日に中富良野町の家に戻った時に、前までは何気なく過ごしていたところが、懐かしく安心できる場所に変っていた。前よりも山がきれいだなと思ったり、空気がおいしいと思ったりするようになった。町から一度離れたことによって、今まで住んでいた町は、自然環境に恵まれているという良さに改めて気づいたのだ。

私は、町が主催したワークショップ「なぞときまちさんぽ」に参加して、町の良い所を再発見するために町中を歩いたことがある。町の人たちと町の良い所や課題を話し合うことができた。北星山の観光リフトに乗り、頂上から町全体を眺めた。そこから見る景色は素晴らしく、この豊かな田園風景を守り続けたいと感じた。

二〇三四年、今から十年後、私は大学を出た後、大好きな中富良野町に住み、町をより良くするための活動をしていきたい。

例えば、広い森林公園を活かしたアスレチックパークをつくり、観光客だけでなく、町の子どもたちも楽しめる場所を増やしたい。

また、町の人口が減ってきているので、「この町に住みたい」と感じて移住してくれる人の増加を図りたい。町外に移住した人もまた戻ってきたいと思えるような自慢できる町にするために、町を活性化し、さらに中富良野町の魅力を発信していきたいと考えている。

そのために、どんな仕事に就いているかは、まだイメージできていない。だが、デザインに興味があるので町の魅力を発信するウェブサイトをつくりたい。他にも、動物が好きなので自然を活かして動物に触れ合えるところをつくったりしたいと夢はふくらんでいる。

二〇三四年、私は中富良野町に住んでいる。そこでは、豊かな自然を守り、町に住んでいる人や訪れる人、町に住む動物たち、みんなの幸せのために暮らしている。

赤ちゃん

石狩市立浜益中学校 田中結芽 1年

「おぎゃーおぎゃー」

二〇二四年四月二十四日十三時八分、私にいとこが生まれました。その日はよく澄んだ空で、学校にいた私は早退し、いとこの元へと急いで駆けつけました。

病院につくと、叔母は陣痛が始まっており、もうすぐ赤ちゃんが生まれるところまできていました。私は「もうすぐ会える。やっと赤ちゃんに会える！」と、心臓がメトロノームのように「どく、どく」と早くなっているのを感じました。叔母のそばには、必ず助産師さんがいました。叔母が「痛い！」と叫ぶと、助産師さんは「大丈夫赤ちゃん降りてきているよ。」と優しく、安心できる声をたくさんかけていました。その様子を見て私も安心できました。叔母は難産だったため、赤ちゃんはすぐには生まれず、沢山いきんでいました。私はただ水を飲ませてあげることしかできませんでした。なかなか生まれてこなかったので、「吸引」という方法を使い、赤ちゃんが生まれてきやすいようにしました。

「おぎゃーおぎゃー」

元気な産声が聞こえてきました。その時、私は産んでもいないのになぜか「解放感」に満たされていました。いよいよ念願の「へその緒」を切る瞬間がやってきました。へその緒は硬く、太かったです。このへその緒だけで赤ちゃんはお腹の中でお母さんから栄養をもらって成長し、そして生まれてきます。「命の誕生は奇跡」という事がどういうことなのかを肌で感じた一日となりました。

二〇二四年四月、私は貴重な経験をさせてもらうことができました。叔母と叔父には感謝の気持ちでいっぱいです。

私の将来の夢は「助産師」です。きっかけは弟が生まれた時の助産師さんとの出会いでした。とても優しく笑顔で対応してくださり、第二の母のような安心感がありました。そんな助産師さんに私もなりたいたいと思うようになり、テレビや本などで助産師さんの仕事について学んでいます。助産師になるためには、たくさん勉強をしなければなりません。辛くなったり、諦めそうになったりしたときには、二〇二四年四月のことを思い出し、乗り越えていきたいです。

二〇XX年の助産師になっている私へ。あなたは、自分がしてもらえた事をお母さんだけではなく、沢山の人に返す事ができていますか？赤ちゃんの幸せを祈り、助産師という仕事に誇りを持っていますか？

夢の長距離走者

北星学園女子中学校 遊佐こまり 2年

「二回ジャンプ、そして体を脱力。」

もう少しで第二幕が始まる。衣装のチェックを終え、私は舞台の袖に立つ。深呼吸をしたら、ついに幕が上がった。

今から十五年後の二〇三九年、私は二十九歳。きっとミュージカル女優として活躍している。いや、必ず。小さい頃からこの夢を追い続け、十四歳の今も、ずっとミュージカルのことを考えている。私は本当にミュージカルが大好きなのだ。

私が初めてミュージカルを観たのは三歳で、四歳の頃にはもうミュージカル女優になると心に決めていた。そこから、ミュージカルに必要な歌やダンス、バレエを習い始めた。日々努力することはとても大変だが、自分の目指す道を信じている私は、一度も諦めたことがない。私の想いが強くなればなるほど、ミュージカルの世界に導かれていると感じる。

二〇三九年、AI化がさらに進んで便利な世の中になっている。経済、医療、建築など様々な分野で活用される。しかし、AIにより、仕事を奪われてしまう人が増えたり、AIに頼り切ることで、人間の持つ思考力、想像力が薄れ始めている。人々の適している職業をAIが判断し、目標を持ったり、夢を追う人が少なくなる。私のように、自分の好きなことに打ち込んだり、希望に胸をときめかせる機会も減っていくのではないだろうか。そんな世の中になるのは不安だ。私は、だからこそ芸術が必要だと考える。

私がミュージカルの沼にハマったのは、劇団四季の『キャッツ』からだ。これはたかさんの猫が登場する作品だ。役者の繊細な体のしなり、視線の動き、吐く息までが猫そのもので、私はすっかりその世界に引き込まれた。それは、努力を積み重ね、感情を声や動きに乗せることができる役者の熱意があるからだと思う。私はそれを見て、体中電気が走ったようにしびれ、全身が隅々まで熱くなった。幼かった私でも、魂の籠った演技に触れ、感動することで、醒めない夢と曲がらない意志を築くことができたのだ。AIにはこんなことは絶対できない。私は夢の長距離走者だ。

十五年後はまだ遠い未来のようだが、それまでに達成しなければならない目標がたくさんある。私の挑戦がいつか一人でも多くの人々の心を動かし、希望を与えられたら、人間が本来持つ、喜びや愛情が消えずに、これからの未来にも広がっていくかもしれない。だから私は、今の道を真っすぐ進む。

10年後の同窓会

苫小牧市立啓明中学校 近藤芦羽 3年

先生、天国から見守ってくれていますか？僕が先生と約束した夢は、叶いましたか？僕が、小学校五・六年生の担任の先生は、いつも元気で優しく先生がいるだけで太陽のように明るく華やかになっていました。子ども達の事を自分の事のように考え、全力で応援をしてくれたり、心配をしてくれる僕にとって憧れの存在でした。小さい頃から教師になる夢も先生は応援してくれていました。それなのに・・・中学校三年生の春、突然の訃報が入ったのです。僕は、何かの間違いだ、悪い冗談であってほしいと先生の死を受け入れる事ができなかつた。二ヶ月前に先生から手紙が届きいつもの優しさあふれる内容で僕の体の心配や勉強の事など書かれていた。僕は修学旅行のお土産と手紙の返事を送ろうと思っていたので返事をまだだしていなかった事がとても心残りとなった。お葬式は会場内に入りきれないほど人であふれ、先生がいかに沢山の人から愛される偉大な教師だったのだと感じました。先生との別れは本当に辛いです。

六年生の卒業式前に、先生とクラス全員でタイムカプセルを作りました。それは先生が大切に保管し、十年後に同窓会をしそこで開封する約束でした。それが㊦㊧㊨㊩年です。先生にもしもの事があっても旦那や子どもに託すからと話していた先生。先生を囲んで焼肉をしながらお酒を飲み昔話を楽しみにしていたのに・・・今まで小・中学校と同じ道を歩んできた友人達ともあと数ヶ月で高校生となり別々の道へ進みます。㊦㊧㊨㊩年、社会人〇年目の人や新社会人もいるでしょう。子どもがいる人もいるかもしれません。クラスのみんなの変化の大きな頃に集まる同窓会は天国からも先生が参加してくれる気がします。

先生が大好きだった歌で、クラスでよく歌っていた曲の歌詞に「出来るだけ嘘は無いようにどんな時も優しくあれるように、人が痛みを感じた時には、自分の事のように思えるように」という部分があり、まさに先生そのものだと思っていました。僕もその歌詞をととても共感しているので、そのような人間になり、先生のような教師に近づけるよう、今できることを真剣に取り組み、夢の実現にむけて一つ一つ努力し続けていきたいと思えます。僕の部屋には、十年後の同窓会の紙と先生からの手紙や写真が飾ってあります。それを見ると、将来へむけて頑張れるお守りとなっています。㊦㊧㊨㊩年、同窓会を楽しみにしています。先生ずっと天国から見守っていてね。

※歌詞は back number 『水平線』より